

(西暦) 2017年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践と関連する要因の検討

学位の種類： 修士（看護学）

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号：16894608

氏名：森 優貴乃

(指導教員名： 勝野 とわ子)

研究の背景：急性期病院に入院する認知症および認知機能が低下した高齢者(以下、認知機能低下高齢者)は、認知症の行動・心理症状やせん妄、感染症などの合併症を併発することが多く、急性期病院の看護師はその看護において困難感を抱いている現状がある。先行研究では急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践には様々な要因が関連していることが示唆されているが、認知機能低下高齢者へ対する看護実践と看護師の特性や労働環境の特性について包括的に関連性を明らかにした研究はまだ行われていない。

目的：本研究の目的は、急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践の実態と、それに関連する要因として看護師の属性と経験、特性、また労働環境の特性がどのように関連しているのかを明らかにすることであった。

方法：東京都内の特定機能病院または地域医療支援病院に研究依頼を行い、一般病棟に勤務する看護師を対象として自記式質問紙調査を実施した。『急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践』の測定には【急性期病院の認知障害高齢者のための看護実践自己評価尺度】を用い、『看護師の属性と経験』、『看護師の特性』は【多次元共感性尺度】、【改訂道徳的感受性質問紙日本語版】、【看護労働環境調査票】を用いて調査を行った。

結果：研究対象者は329名(回収率31.1%)であった。【急性期病院の認知障害高齢者のための看護実践自己評価尺度】の合計得点は 84.74 ± 11.45 であり、下位尺度の[認知機能と本人に合わせた独自性のあるケア]の平均得点が最も低い結果となった。

『急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践』を従属変数、『看護師の属性と経験』、『看護師の特性』、『労働環境の特性』を独立変数として単変量解析を行い、統計学上有意な関連がみられた変数と仮説に基づき、重回帰分析を行った。その結果、【急性期病院の認知障害高齢者のための看護実践自己評価尺度】の合計得点と関連がみられたのは、影響が強い順に、看護師の「道徳的感受性」、「看護に対する自分自身での振り返りの頻度」、『労働環境の特性』、「認知症やせん妄に関する研修や勉強会への参加経験の有無」、「専門職チーム、老人看護専門看護師や認知症看護認定看護師等への相談経験の有無」、「看護に対する他者との振り返りの頻度」、「認知症の人に対する認識」の7つの変数であり、道徳的感受性が最も影響しているという結果となった。また、分散の30.7%が説明された。

考察：急性期病院の看護師は、認知機能低下高齢者の認知機能と本人に合わせた独自性のあるケアを十分に行えていない現状が示唆された。また急性期病院において看護師がパーソン・センタード・ケアを目指した認知機能低下高齢者へ対する看護実践を行うためには、看護師の道徳的感受性を高めるための倫理教育の充実や、看護を振り返る習慣を身につけることが重要であることが考えられる。また、看護師の多面的な労働環境の改善、認知症の教育・研修の受講、認知症看護認定看護師等の専門職への相談できる環境、他者と看護の振り返りを行う機会をつくることなど組織的なサポートの必要性についても示唆された。